

研究論文

多言語社会における日本人の言語使用

—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

福田 牧子 (バルセロナ自治大学, 翻訳通訳学部/CUSCバルセロナ大学)

スペイン・カタルーニャ自治州では、近年「新移住者」と呼ばれる移住者の大量流入が様々な問題を提起しており、中でも言語に関する問題が議論の中心となっている。自治州の固有言語および公用語であるカタルーニャ語と、スペインの国家公用語であるカスティーリャ語が競合する社会において、移住者はいかなる言語使用をしているのであろうか。本研究はカタルーニャに在住する日本人を一つの事例とし、その言語使用の実態を探るものである。カタルーニャのような多言語社会において、すべての在住日本人が一様の言語使用パターンを示すのかという問題意識に基づき、本研究は「カタルーニャ在住の日本人は言語使用に関して均質ではなく、複数のサブグループから構成される」という仮説を設定し、言語使用に関するデータの主成分分析を通して検証することを試みた。その結果、主に使用する言語（日本語・カスティーリャ語・カタルーニャ語）に基づいた三つのサブグループが特定された。なお、英語を主に使用するグループが本分析からは確認されなかったことは注目に値する。これらの言語使用の傾向と、インフォーマントのプロフィールを構成する変数に対してさらに分散分析を行った結果、両者の間に相関関係が確認された。

キーワード：言語使用, カタルーニャ, 移住者, 在外日本人, 多言語社会

Language Use of Japanese Residents in a Multilingual Society: The Case of Japanese Residents in Catalonia, Spain

Makiko FUKUDA (Autonomous University of Barcelona, Department of
Translation and Interpreting/CUSC University of Barcelona)

Recently, in the Autonomous Community of Catalonia of Spain, a large flow of 'new migrants' has raised many questions, among which language related issues in particular have emerged as major concerns. In a society like Catalonia, where two languages of different status — Castilian, the official language of the whole Spanish state, and Catalan, the autonomous community's own and official language — coexist, how do the immigrants use languages? This study explores Catalonia's sociolinguistic situation through a case study of language choice by Japanese residents in Catalonia. In this multilingual society, do all the Japanese residents show the same pattern of language use? Starting from this question, this study attempted to verify the hypothesis that Japanese residents in Catalonia are not homogeneous in terms of language use, but are made up of several subgroups, by analyzing the data through principal component analysis. As a result, three subgroups in terms of language use were identified. It should be noted that we found no subgroup of Japanese residents who use mainly English. Additionally, the patterns of language use and some variants related to subjects' social profile, such as length of stay in Catalonia and motivation for stay, were analyzed through analysis of variance. As a result, some correlation between these factors was identified.

Key words: language use, Catalonia, immigrants, Japanese overseas, multilingual society

1. はじめに

一般的に、海外在住日本人はその移住の一時性によって特徴づけられる。たとえば、大洋州地域・北米・西欧は留学生や研究者等の割合が多いなど、地域によってその内訳に若干違いはあるものの、企業関係者が大部分を占める人口構造も特徴の一つとしてあげられる。

従来の海外在住日本人に関する研究の多くはこれらの短期滞在型の日本人に焦点をあて、彼らの普段の生活は日本人との付き合いが大部分を占め、ホスト社会にいながらにして日本的環境を最大限に維持しているという点を指摘している(江淵, 1983; Goodman, 1993; 中根, 1967; 佐藤, 1997; 柴野, 1983; White, 2003; Glebe, 2003; Ben-Ari, 2003など)。このように短期滞在の場合、日本への帰国や他地域への移動を前提としていることから、一般的にホスト社会に溶け込もうとする意識は低くなりがちであるとされている。日本企業が集中する大都市などでは、企業関係者等に代表される一時的な在住者が各ホスト社会在住の日本人の大部分を占め、その結果、前述のような生活様式が彼らの代表的なイメージとして一般化され、ステレオタイプ的なイメージが生み出される。とくに言語に関しては、一般的に現地社会の言語を習得する代わりに日本語が生活の大半を占めていると言われている。さらには、日本経済のグローバル化の産物ともいえるような彼ら(Befu, 2001; Glebe, 2003)にとっては、英語がきわめて重要視されている。こうした状況から、英語圏に限らず日本国外では現地語よりむしろ英語に重要性が見出され、現地語は世界的にプレステージがあると認識されている言語でない限り、視野に入らないことが多いとされる。しかし、カタルーニャのようにカスティーリャ語(=スペイン語、国家公用語)とカタルーニャ語(自治州公用語)という二つの異なる位置づけの言語が競合する社会においてもこうした言語行動が見られるのだろうか。そして、すべての在住日本人が一様の言語使用パターンを示すのであろうか。

本研究は「カタルーニャ在住の日本人¹⁾は言語使

用に関して均質ではなく、異なる言語使用パターンに特徴づけられる複数のサブグループから構成される」という仮説を設定し、その言語使用の実態と多様性を示すことを目的とする。

2. 背景

2.1 カタルーニャの移住者と言語

カタルーニャ自治州は一般にスペイン語として知られる国家公用語のカスティーリャ語と、自治州固有言語のカタルーニャ語の並行公用語制度(Coofficialitat)を採用している。

カタルーニャでは、20世紀のフランコ政権下の言語政策によってその固有言語の社会的使用が著しく弱体化した。独裁政権崩壊後、カタルーニャはカタルーニャ語の知識と使用を社会に回復させる言語正常化を強力に推し進めた。2007年のカタルーニャの知識に関する調査(Institut d'Estadística de Catalunya IDESCAT, 2007²⁾)によると、カタルーニャ領土内に住む人口の93.8%がカタルーニャ語を理解し、75.6%が話すことができる。カタルーニャ語が理解できる、あるいは話すことができる人口自体は増え、自治州も積極的な言語政策を展開しているものの、全体的にはカタルーニャ語は衰退の傾向にあると指摘されている。

その最大の要因がカスティーリャ語との社会的二言語併用である。60年代、70年代のスペイン他地域からの移民の流入は、カタルーニャにおけるカスティーリャ語人口を増加させたが、近年ではそれらの移住者はNouvingutsと呼ばれる、スペイン国外とくに南米やヨーロッパ諸国からの移住者にとって代われ、言語正常化のプロセスに移住者の言語対策という新たな挑戦が付け加えられたのである。現在ではこれらの移民の存在もカタルーニャの社会言語状況に大きな影響を及ぼしている。これらの外国人のカタルーニャへの流入は一定になるところか、さらに加速・多様化し、カタルーニャ全土に広がっている(Secretaria per a la Immigració, 2005, p. 4)。

移民がホスト社会の言語を習得することは、その社会統合の意思や可能性の重要なバロメーターとなるが(Llompарт, 2007)、カタルーニャの場合は、カ

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

カタルーニャのエスニック・アイデンティティの重要なシンボルであるカタルーニャ語と、国家レベルの公用語であるカスティーリャ語が同じ領土内で併用されているという複雑な状況にある。移住者は一般的に、社会に溶け込む際にカタルーニャ語が重要な役割を担うことを十分理解しながらも、実際は「実用性」を重視し、カスティーリャ語のみを学ぶ傾向にあると指摘されている(Boix & Vila, 2006; Jaime, 2002)。つまり、カスティーリャ語は必要性に迫られて学ぶ一方で、カタルーニャ語はカタルーニャ社会へ十分に溶け込むことを望む一部の個人が任意で学ぶという状況にあり、実際にカタルーニャの新移住者と言語に関する研究は、その点について意見が一致している(Aguilera, 2001; Beltrán & Sáiz, 2001; Boix & Vila, 2006; Llompart, 2007; Ros, 2006など)³⁾。こうして、カスティーリャ語=実用的な言語・無徴の言語、カタルーニャ語=社会統合への言語・有徴の言語、という二項対立的な図式の周辺で移住者の言語使用パターンが形成されていく。こうした複雑な状況から、カタルーニャ語と新移住者の間にカスティーリャ語が「仲介し」(Aracil, 1983)、カタルーニャ語へのアクセスをより困難にしているというのが現状である(Boix & Vila, 2006)。

以上が一般的に指摘されるカタルーニャへの移住者の言語使用の傾向である。こうした現実を前に、市役所を初めとする様々な公的機関がカタルーニャ語が受け入れ言語となるような活動を展開している。外国人向けのカタルーニャ語コースに登録する新移住者の数は年々増えてはいるものの、リソースや学習者の動機の不足により、外国人がカタルーニャ語を学習する環境は十分に整っていないというのが現状のようである⁴⁾。

こうしたカタルーニャの社会言語的状況から、以下の問題が提起される。第一に、ホスト社会の言語の習得が社会統合にとって重要なキーであるとするならば、カタルーニャのように二つの異なる地位を持つ言語が競合する社会の場合、移住者はどのような言語使用パターンを示すのかという点。第二に、モノリンガルの伝統が根強い日本という社会から来た移住者はカタルーニャの多言語状況の中でどのよ

うに生きるのかという点があげられる。新移住者とくに子供の言語習得の実態等に関する総合的な研究や、中国人(Beltrán & Sáiz, 2001; Beltrán, 1997, 1998a, 1998bなど)や北アフリカ出身のイスラム系住民(Losada, 1993, 1996, 1997, 1999; Colectivo IOÉ, 1994, 1996; López, 1992, 1993, 1994など)など、比較的規模の大きい移住者コミュニティに関する研究はある程度なされているものの、日本人に関してはその実態はほとんど知られていない。

第三に、現時点では海外在住日本人の言語使用実態に関する詳細な調査はなく、その生活実態に関する研究調査から言語使用の一部が垣間見られる程度であることも問題である。

本研究では以上の問題意識に基づき、カタルーニャ在住の日本人の言語使用の実態を統計的分析手法を用いて明らかにすることを試みたものである。

2.2 カタルーニャ在住の日本人

2.2.1 カタルーニャ在住日本人の人口分布

Valls (1998)によると、スペインで日本人在住者が確認されたのは比較的最近のことあるが、1960年代後半から1970年代後半の間に日本企業のスペイン市場に対する関心が高まり、その後スペイン在住日本人の数は増加の傾向をたどった。その後も少しずつではあるが着実に伸び続け、2008年には6,717人に達している。カタルーニャとマドリッドはスペインの中でも日本企業が最も多く集中する自治州であり、スペイン全体に居住する日本人の70%がこれらの自治州に集中している。2007年に在バルセロナ日本国総領事館が発表したデータによると、その管轄地域(カタルーニャ、バレンシア、バレアレス諸島)に住む日本人の数は2,461名で、そのうちの84%の2,043名がカタルーニャ自治州に集中していた。バレンシア自治州には13%の310名、バレアレス諸島には4%の108名が居住していた。県ごとに見ると、日本人はバルセロナ県に集中しており、カタルーニャ全体に居住する日本人の80%近くを占める。そのうち60%がバルセロナ市に居住しており、さらにそのほぼ半数がSarrià-Sant Gervasi地区(29%)およびLes Corts地区(27%)の二地区に集中している。こうした集住のパターンは日

本国総領事館がLes Cortsに位置すること、また各企業が確保している駐在員用の住居がこれらの地区に存在することが要因であると見られる(Fukuda, 2009b).

2.2.2 社会文化的特徴

移住には様々な動機があるが、日本人のカタルーニャへの移住動機は主に労働・学業・家族・文化の四つのカテゴリに分類できるだろう。著者の観察ではこの他にも少数派ではあるが「日本に住みたくない」などの感情的な理由も見られた。

これらの中で最も多いのが労働関係である。日本人コミュニティの出現は日本からの資本投資と直接結びついており(Beltrán & Sáiz, 2002), これらの日本人の大部分が企業の管理職、技術職あるいは熟練労働者に集中していること(カタルーニャ在住日本人労働者の80%)は、カタルーニャ在住日本人を特徴づける際にとくに強調される点である。これらのカタルーニャ在住日本人企業関係者の数が比較的多いのは、日本企業はカタルーニャで管理職を探すよりも日本の本社から直接派遣する方を好むためである。

1969年にスペイン初の日本企業サンヨー・スペインが進出して以来、日本企業のスペインへの直接投資はカタルーニャに集中し、現在ではその数は163社にのぼり(2007年)、スペイン全体の日本企業数のほぼ半数を占めている。これらの日本人労働者は一般的に30歳から40歳の男性で、女性は全体の25%を占めるに過ぎない。滞在期間は3年から5年であるが、中には10年以上続けて滞在する場合もある。通常これらの労働者は家族と共に赴任するが、子供がいる場合にはバルセロナ日本人学校へ通わせることが多い(Fukuda, 2009b).

企業関係者に次いでカタルーニャ在住日本人の中で重要なセクターを占めているのが学生である。Beltrán & Sáiz (2002)の調査によると、バルセロナを留学先として選択するアジア人の大部分が日本人である。たとえばバルセロナ大学の外国人向けカスティーリャ語コースでは、アジア出身の全学生の80%が日本人である。言語習得に限定した留学ではなく、より専門的な学業目的でカタルーニャに来た

学生は、その数は少ないものの多くが大学院に進学する。

企業関係者と学業関係者に次いで多いのが、家庭の事情による移住である。家族を形成することも移住の主な動機の一つであると言える。家族に関する移住の動機には国際結婚家庭とカタルーニャに永住している日本人家族とがある。日本人の全婚姻件数(日本国内も含む)の中では国際結婚カップルの割合は比較的少数ではあるが、日本を去って配偶者の国へ移住する女性の数は年々増えている。カタルーニャに永住する日本人の中では、国際結婚家庭は重要なサブグループを形成している。Scott & Cartledge (2009)の国際結婚家庭のホスト社会への同化に関する調査では、国籍が異なる夫婦によって形成される家庭について、二つの移住のタイプを紹介している。一つは外国人の配偶者と出会い、その配偶者の出身国へ永住するタイプ、もう一つは外国に移住し、そこで将来の配偶者と知り合ってそのまま定住するタイプである。二番目のタイプに関しては、移住者は外国人の配偶者と留学中に知り合うというケースが多い(Scott & Cartledge, 2009, p. 65)⁹⁾。

カタルーニャの場合は男性が現地出身で女性が日本人であるというケースの方が、その逆のケースと比べて一般的のようである。最初のケースでは、女性が学業に関わる何らかの動機でスペインのある地域あるいはカタルーニャに来ており、そこで将来の配偶者と出会い、そのままカタルーニャに居住するパターンが多く見られる。中にはスペイン外で知り合い、後にスペイン他地域あるいはカタルーニャに移住してくるケースもある。男性が日本人である場合は、初めは日本企業から一定の期間駐在員として来ていたものの、配偶者との出会いから結果的に長期滞在あるいは永住になる、というケースが多い(Fukuda, 2009b).

永住・長期滞在日本人の中で、日本人同士の夫婦の家庭は少数派で、彼らの多くがバルセロナの郊外あるいはカタルーニャ内の他県に住んでいる。親の世代は、料理や武道などの文化資本が活用できる形で日本文化に関連した職業に就いていることが多い(Fukuda, 2009b).

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

以上のグループに加え、スペインあるいはカタルーニャの様々な文化的側面に興味を持ってバルセロナへ渡った人々もいる。たとえばガウディの作品を初めとする建築は日本人の心を魅了し続け、専門に学ぶ人の数が多い。実際、日本人建築家はカタルーニャ在住日本人の中でも重要なサブグループを形成している。サッカー、とくにバルセロナ・サッカー・クラブ（通称バルサ）に対する熱も日本人の間で近年著しく上昇し、中にはチームに何らかの形で関わられるような仕事を求めてカタルーニャへ渡る人々もいる (Fukuda, 2009b)。

この他にも、観光客に代表される一時的滞在のグループも忘れてはならない。その数はここ数年若干減少してはいるが、バルセロナは日本人観光客の中でも人気の観光地として不動の地位を築いている。実際、過去にカタルーニャを旅行で訪れたことがあり、魅了されて移住という形で戻って来るというケースも多い。定年後の人生を国外で過ごそうと思っている日本人にとっても、バルセロナは常に人気の都市の上位を占めている⁶⁾。このように、ある日本人にとって旅行の経験は移住の重要な動機となっているのである (Fukuda, 2009b)。

3. カタルーニャ在住日本人の言語使用の実態に関する調査およびその分析方法

本研究は、「カタルーニャの日本人は均質ではなく、言語使用に関して様々なサブグループを形成している」という仮説を検証することを目的とし、カタルーニャ在住日本語母語話者の言語使用の実態を分析した。

3.1 データの収集

以上見てきたように、カタルーニャ在住の日本人は滞在の動機も滞在形態も様々である。カタルーニャのような多言語社会において、言語使用に関しても同様に多様性が見られるのであろうか。

調査は基本的にバルセロナ日本人学校やバルセロナ日本語補習校、バルセロナ水曜会（在カタルーニャの日本企業の協会）など、在カタルーニャの日本関連団体の協力を得て、カタルーニャ在住の日本人を対象にアンケートの形で実施した。配布された

200部のアンケート用紙のうち、121部が回答され、返却された (60.5%)。

アンケートは二項目からなる。第一にインフォーマント個人の基本データを求めた。これらのデータにはカタルーニャ在住年数や滞在目的などの社会的変数を含め、後に言語使用との間とこれらの変数の間の関係を分散分析を用いて分析した。これらの変数は基本的に本研究に関連する先行研究 (Torres [coord.], 2005; Vila, 2003; Yamamoto, 2001, 2002) に基づいて決定したが、インフォーマントの実際の観察や直接的な接触を通して、必要だと思われる事項も含めた。

第二に「家庭外における言語使用」、「家庭内における言語使用」、「メディアにおける言語使用」に関して質問した。「家庭外における言語使用」については、①家庭外における個人間の言語使用と②商業・サービス機関等における言語使用の大きく二つのタイプに分けられる。「個人間の言語使用」を本研究では「個人の面と向かった関係によって特徴づけられる家庭外の様々な社会的文脈における言語使用」と定義し、隣人・仕事（学生の場合は学校）・各種団体への参加・娯楽・週末・友人と六つの相互行為の場面における言語使用を尋ねた。一方②の言語使用は、特定の人との頻繁な接触が前者に比べて少ない場合が多いと思われる。たとえば「店員と客」のようにコミュニケーションをする相手との社会的役割の関係は一定であっても、その人間自体は変わる可能性が多い（例：店で毎回同じ店員が対応するわけではない）。また、相手とのコミュニケーションも短い決まったフレーズのみで目的を達することができることが多く、極端に言えば単語の羅列だけでも十分用を足せることがある。このように②のタイプの言語使用は①のタイプと比べると一般的にその相互行為が比較的限られる場合が多いため、両者を異なるタイプの言語使用として区別した⁷⁾。なお、後者については飲食施設（レストラン、カフェテリアなど）や商業施設（デパートなど）、その他病院や銀行、役所など六つの場所において通常最もよく使用する言語を尋ねた。

家庭内における言語使用は、Yamamoto (2001)の

言語使用の表（「付録」参照）をもとにして作成した表を用い、家庭の各メンバー間（現在同居しているすべてのメンバーを含む）で使用する言語に関する回答を求めた。

メディアでの言語使用についてはテレビやラジオ、雑誌など7つのメディアにおいて選択する言語（選択肢は日本語・カステイーリャ語・カタルーニャ語・英語・その他）の頻度について0（まったく利用しない）、1（まれに）、2（年に数回）、3（月に数回）、4（週に数回）、5（毎日）の6段階での回答を求めた。

3.2 データの分析方法

本研究の目的は、言語使用に基づいたカタルーニャ在住日本人の細分化を概観することにある。そのための分析方法を選択するにあたり、事前にクラスター分析と主成分分析のどちらが適当であるか検討した。

クラスター分析は個人の集まりをその類似性によって均質なサブグループに分類するものであるが、この手法を用いるにはこれらの個人をグループ化する際の基準を明確にし、これらのグループ内では均質性を、グループ間では十分に差異化できる必要がある。ところが、分析の対象としたインフォーマントは連続した形で分散しており、一つのグループに完璧に当てはまらないケースが多く見られた。インフォーマントを3つ以上のグループに分けると、それらを異なるグループとして明確に区別できるほどの距離が確認されなかった。

そこで、本研究のインフォーマントについてはクラスター分析は適切ではないと判断し、主成分分析による分析を試みた。主成分分析はデータのマトリックスに含まれる情報をまとめるのに用いられる。主成分分析を使用すると、元の複数の変数に潜在する要素を新しい変数、つまり主成分にまとめ、データを簡素化し、その数を減らすことができる。本研究の分析は、上述の言語使用のうち家庭外における言語使用および家庭内における言語使用の二つのタイプの変数に基づいて行なったが、これらを細かく分けると、家庭外の十二の場面・領域そして家庭内の言語使用と、計十三の変数を分析の変数として

用いることとなる。しかしこの分析方法を用いることによって、カタルーニャ在住日本人を言語使用に基づいて大まかに傾向を割り出す際の主なファクターを特定することができると考え、この方法を用いた。なお、これらの変数は各場面において各言語がどれだけの割合で使用されているかを示すものである。

言語使用の実態を数値化するにあたり、本研究では使用指標(Torres, 2005)を用いた。「家庭外における言語使用」のうち、前述の①のタイプに関しては、インフォーマントは近所や職場など六つの各場面において最も接触の多い個人3名を挙げ、使用する言語を回答した。これをもとに、各言語の使用指数を計算した。指数は、これらの3名の人間との関係においてインフォーマントが使用する言語の割合に基づいて計算した（選択肢は日本語、カステイーリャ語、カタルーニャ語、英語、その他）。たとえば、近所づきあいで最も接触の多い三人のうち、一人とはカステイーリャ語、残りの二人とはカタルーニャ語で話すという場合のカステイーリャ語の使用指数は、 $1/3$ で、およそ0.33になる。三人ともカステイーリャ語で話す場合は指数は1となる。なお、一人の人に対して二つの言語を同程度使用する場合、その各々の言語は0.5として計算した。

②のタイプに関しては、銀行や病院など六つの領域で通常使用する言語を問い、使用指数を計算した。計算方法は①とほぼ同様で、たとえば病院のみ英語を使用し、他はカステイーリャ語を使用する場合はカステイーリャ語の使用指数は $5/6$ でおよそ0.83となる。

家庭内における言語使用も同様に各言語の使用指数を計算した。たとえば、四人家族で家族のメンバーのうち一人とカステイーリャ語を使い、一人と日本語を使い、もう一人とカタルーニャ語を使う場合、それぞれの使用指数は $1/3$ 、つまり約0.33ということになる。

メディアにおける言語使用は、対人の言語使用とは性質が異なるという理由から、主成分分析の変数には含めなかった。

なお、後述のように（3.3.1参照）主成分分析の結

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

果と比較する目的でクラスター分析も同様に行ったところ、双方ともその根底ではほぼ同じ結果を示すことがわかり、本研究は主成分分析によって割り出された三つのサブグループ、つまり三つの主要な言語使用の傾向に基づくこととした。

サブグループを特定した後は、言語使用と滞在年数、滞在動機との間の相関性を検証するため、これらの変数に対して分散分析も行った。

3.3 データ分析の結果

3.3.1 言語使用に基づくサブグループ

主成分分析の結果、主に使用する言語に基づいた三つサブグループが特定された。図1は二次元にインフォーマントの分散を表したものである。図に見られるように、インフォーマントを示すプロット(□)はほぼ(-5.8, 4.0) (3.6, -0.5) (-3.8, -1.0)付近を頂点とする三角形の上あるいはその内部に分布していることが読み取れる。

図2は言語使用の変数と主成分との相関関係を示

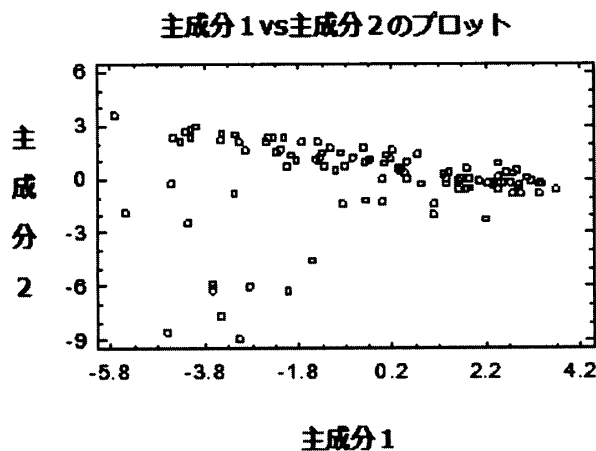


図1 言語使用に関する主成分1, 2

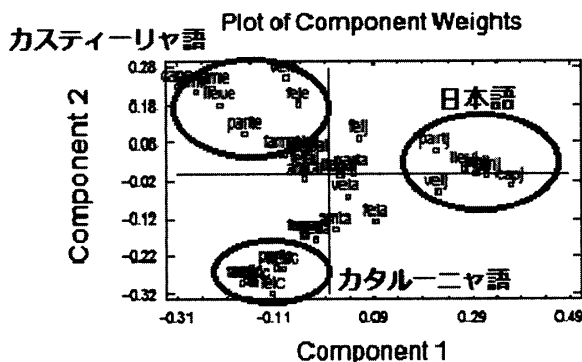


図2 対人関係における言語使用

すと同時に、各言語の使用を描いている。○で囲ってある3つの部分にはそれぞれ日本語、カスティーリャ語、カタルーニャ語の言語使用が集中している⁹⁾。

主成分1の各変数のウェイトに注目すると、正のウェイトは日本語使用と関連した変数に、負のウェイトはカスティーリャ語およびカタルーニャ語の使用と関連した変数に見られる。つまり、主成分1は日本語使用と強い正の相関を、またカスティーリャ語とカタルーニャ語使用と強い負の相関を示している。これらの点の分布から、日本語使用の変数は右部分に、現地語使用つまりカスティーリャ語とカタルーニャ語の使用は左部分に分布していることが分かる。

一方、主成分2はカスティーリャ語の使用と強い正の相関を示し、カタルーニャ語の使用と強い負の相関を示している。したがって、主成分1は日本語を使用するか、あるいは現地語(カタルーニャ語・カスティーリャ語)を使用するか、主成分2はカスティーリャ語を使用するか、あるいはカタルーニャ語を使用するかの、二元性として解釈することができる。これらの二つの主成分に加え、英語使用と正の相関を示す第3の主成分も検出されたが、その周辺にはきわめて少数のインフォーマントしか見られなかった。英語使用はカタルーニャ語同様非常に少ないが、両者の違いは後者が一部のインフォーマントにとって生活言語であるのに対し、英語は基本的に現地語のサポートとして使用されるにとどまっているという点である⁹⁾。このように、英語の使用はきわめて限定的なものであり、その使用によって特徴づけられる集団が形成されるほどには至らない。

以上のように、インフォーマントは主に日本語・カスティーリャ語・カタルーニャ語の三つの言語使用の傾向を示し、三角形状に分布している(図3)。

ただし、この図はすべてのインフォーマントが言語使用分布の三角形の頂点、つまり日本語、カスティーリャ語、カタルーニャ語使用という三つのケースに正確に当てはまるということを意味している訳ではなく、様々な異なる度合いで連続性を持って三角形の頂点周辺あるいは三角形内部に分布して

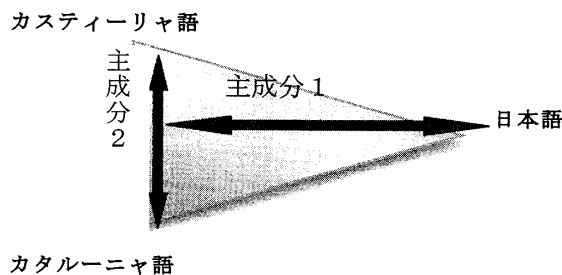


図3 言語使用の「三角形」(Fukuda, 2009b)

いることを意味している。たとえば、日本語使用の頂点の周辺に分布しているプロットは日本語以外の言語も使用するかもしれないが、主に日本語を使用するインフォーマントを表している。

ここでもう一度クラスター分析と主成分分析とを通して得られたインフォーマント個人の分布を比べてみると、両者の結果には共通した傾向を読み取ることができる。

図4はクラスター分析、図5は主成分分析を使用した結果であるが、グループ2に分類されるインフォーマント(×)は右寄り、つまり前述の日本語の優勢的使用のエリアに見られる。一方グループ1のインフォーマント(□)は図の左上部付近、つまり前述のカステイーリャ語使用のエリアに多く見られる。最後に、グループ3(○)のインフォーマントは、カタルーニャ語使用のエリアである図の左下付近に見られる。

主成分は元のすべての変数から新たに抽出された変数であり、わずかな誤差を生むこともあるが、図4と図5を比較すると両者はほぼ同じような結果を示していることが分かる。

これらの中で最大のサブグループは、日本語使用の周辺に集まるグループ($n=72$)であり、全インフォーマントの約60%を占める。その大部分が仕事の関係上カタルーニャに在住する個人およびその帯同家族である。滞在期間は三つのサブグループ中最も短く、平均して約3年であることから、このグループに分類されるメンバーは基本的に一時滞在あるいは渡西間もない人々から構成されると考えられる。

とくに私的領域における日本語の使用は顕著であり、彼らの対人関係は基本的に同国人が中心となっ

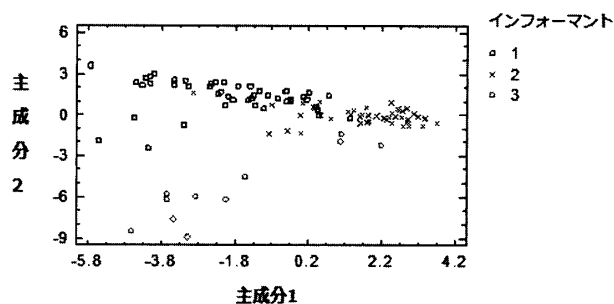


図4 クラスター分析による言語使用に基づいたサブグループ

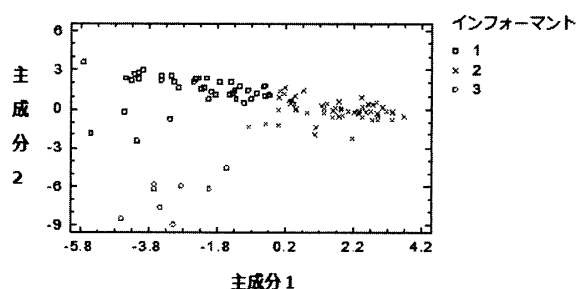


図5 主成分分析による言語使用に基づいたサブグループ

ていることをうかがわせる。唯一仕事の領域では英語もかなりの程度で使用されている。商業施設やサービス機関においてはカステイーリャ語が最も使用されているが、病院等の特定の領域ではごく例外的に英語の使用が見られる。詳細を説明できる程度のコミュニケーション能力が要求される場面では、英語が彼らのカステイーリャ語能力を補助する役割を果たしているのである(図6)。

メディアにおける言語使用に関しても、現地で視聴できる日本語メディアの数が限られているにもかかわらず日本語が最も選択されている(図7)。現地語の知識がない、あるいは少ないために、ラジオなどのメディアを楽しむことは難しいが、視覚メディアの場合は映像という視覚的情報によって内容はだいたい想像可能なため、現地語の能力がさほど高くなくとも利用は可能である。実際、このグループに分類されるメンバーはかなり頻繁にカステイーリャ語のテレビ放送を視聴している。一方、新聞や雑誌書記メディアの場合、ある程度の読解能力が要求されるため、そのレベルを持たない場合はその利用は難しい。そのため、利用頻度は年に数回程度という回答が多く、視聴覚メディアに比べてかなり低

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

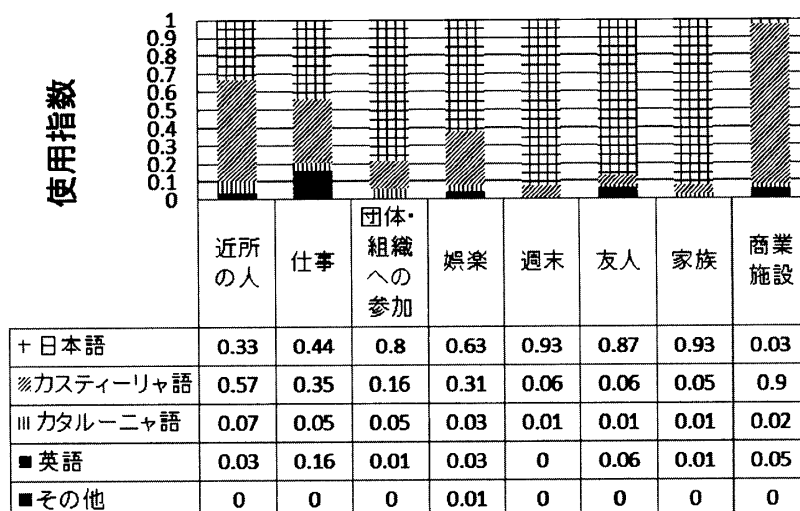


図6 対人関係における言語使用の指標の平均，日本語使用グループ

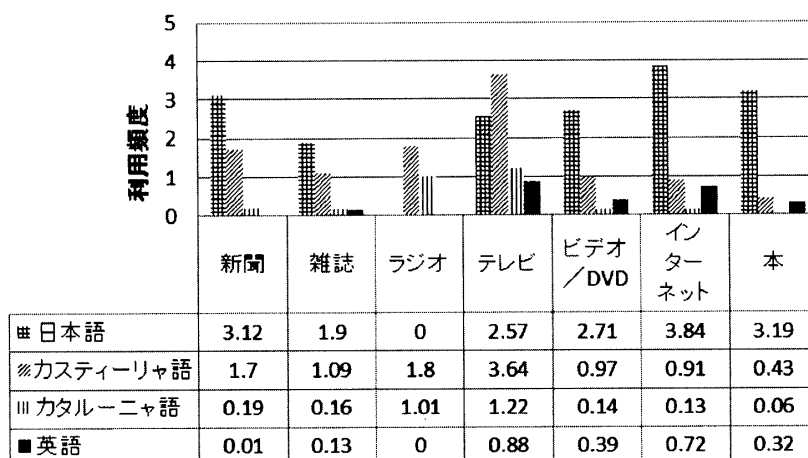


図7 メディアにおける言語使用の頻度の平均，日本語使用グループ

くなっている（新聞：1.7，雑誌：1.09）。

前述のサブグループに次いで多数のインフォーマントが確認されるのが、カスティーリャ語の主な使用の周辺である（ $n=41$ ）。また、カタルーニャ語・英語がほとんど使用されていないことも特徴としてあげられる。このグループでは、永住者や国際結婚家庭、アカデミックな目的でカタルーニャに渡った人々が数多く見られ、全体的にカタルーニャ滞在期間は長い（平均約11年）ことも特徴である。

公的領域でも私的領域でもカスティーリャ語の使用が優勢で、たとえば国際結婚夫婦はカスティーリャ語でコミュニケーションをとることが多い。商業施設やサービス機関ではほぼカスティーリャ語の

みを使用している。カタルーニャ語も併用するインフォーマントも一部見られたが、それはとくにレストランなどさほど高い会話能力を要求されない状況に限られている（図8）。

メディアでも同様にカスティーリャ語が主に選択されており、とくにテレビと新聞においてより顕著に見られる。一方、インターネットや読書などは日本語使用のグループと同様、日本語が最も頻繁に選択されている（図9）。

最後に、カタルーニャ語を主に使用するインフォーマントは分析対象となったインフォーマントの中で最も少数ではあるが（ $n=8$ ）、他のグループに見られない言語使用のパターンは注目に値する。こ

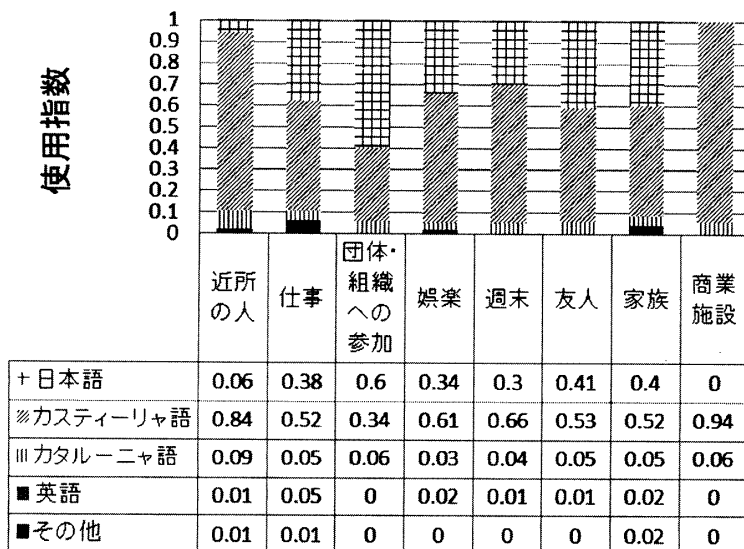


図8 対人関係における言語使用の指標の平均, カスティーリャ語使用グループ

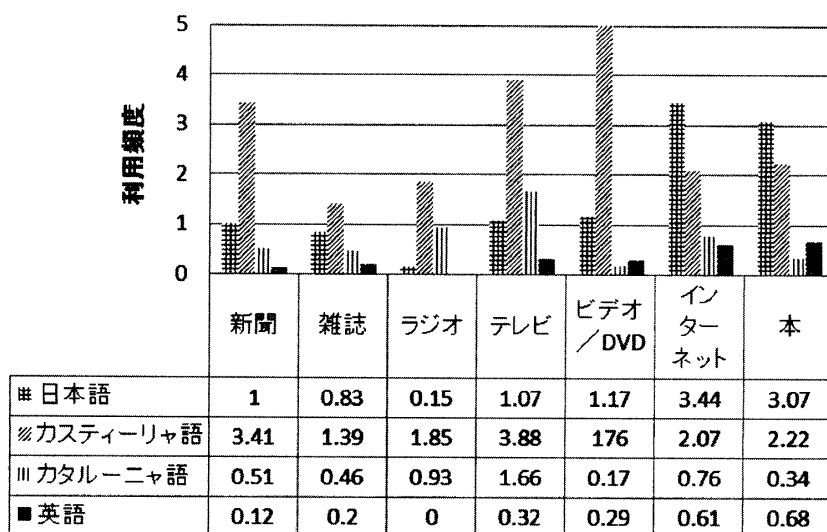


図9 メディアにおける言語使用の頻度の平均, カスティーリャ語使用グループ

のグループに分類されるメンバーは、国際結婚家庭あるいは永住者である。滞在年数は三グループの中で最長であり、平均およそ17年である。

家庭外およびメディアにおいてはカタルーニャ語を主に使用している。一方、家庭においてはカタルーニャ語に次いで日本語の使用が顕著である。これは、これらの個人すべてが国際結婚家庭であり、子供との言語使用パターンに日本語を主に使用していることが影響しているものと見られる。

一方、家庭でのカスティーリャ語の使用は確認さ

れなかった。商業施設においては、カタルーニャ語が最も多く使用されているが、カタルーニャ語単独の使用よりむしろカスティーリャ語との併用の方が一般的である。なおこの状況においては、日本語も英語も実質的にまったく使用されていない(表1)。

メディアにおける言語使用に関しては、新聞とテレビでカタルーニャ語が最も頻繁に選択されており、カスティーリャ語使用グループと同様、言語使用の好みはこれら二つのメディアに反映されていた。インターネットと本に関して日本語が頻繁に選

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

表1 対人関係における言語使用の指標の平均, カタルーニャ語使用グループ

	近所の人	仕事	団体・ 組織への参加	娯楽	週末	友人	家族	商業施設
日本語	0.03	0.18	0.48	0.23	0.44	0.44	0.27	0
カスティーリャ語	0.33	0.16	0.11	0.15	0.03	0.03	0	0.39
カタルーニャ語	0.6	0.5	0.41	0.44	0.36	0.36	0.51	0.6
英語	0.05	0.16	0	0.18	0.17	0.17	0.2	0.01
その他	0	0	0	0	0	0	0.02	0

表2 メディアにおける言語使用の頻度の平均, カタルーニャ語使用グループ

	新聞	雑誌	ラジオ	テレビ	ビデオ/DVD	インターネット	本
日本語	1	2	0	1.75	2.38	3.5	3
カスティーリャ語	3	1.75	1.75	2.63	2.38	2.88	1.25
カタルーニャ語	3.88	1.13	0.63	3.75	2.38	1	1.25
英語	0.63	0	0	0.88	0.75	2	1.13

扱われる傾向は、他のグループと共通している（表2）。

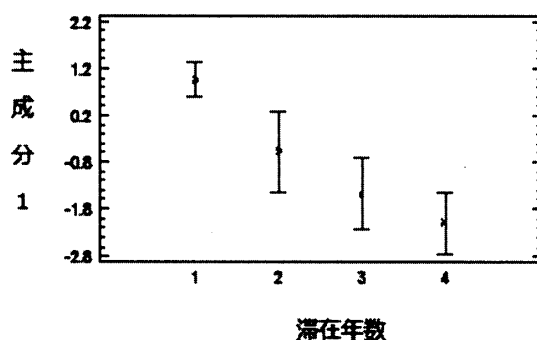
3.3.2 言語使用パターンと滞在年数, 滞在動機

次に、言語使用のパターンと社会的変数との関係を分析した。各グループのプロフィールに注目してみると、言語使用のパターンと滞在年数、滞在動機等の変数との間に何らかの関係があると推定される。そこで、本研究では(1)カタルーニャ滞在歴が長いほど現地語を使用する、(2)労働関係でカタルーニャに在住している人は日本語を主に使用する一方で、本人の自発的な意思でカタルーニャに渡った人は現地語を使用する傾向にある、という仮説を検証するため、主成分分析で得られた二つの主成分（第一主成分：日本語⇄現地語、第二主成分：カスティーリャ語⇄カタルーニャ語）について滞在年数と滞在動機が影響するのかどうかということそれぞれ分析して明らかにした。

まず第一主成分との関係について分析した。なお、滞在年数は5年未満・5年から10年・10年から15年・15年以上の4つのカテゴリに分けた。その結果、図10が示すように第一主成分と滞在年数の間に相関関係が見られた($p < .0001$)。つまり、滞在年数が短いほど日本語の使用にとどまり、長くなるほど現地語を使用する傾向が見られた。

これを第二主成分のカスティーリャ語使用あるいは

Means and 95.0 Percent LSD Intervals



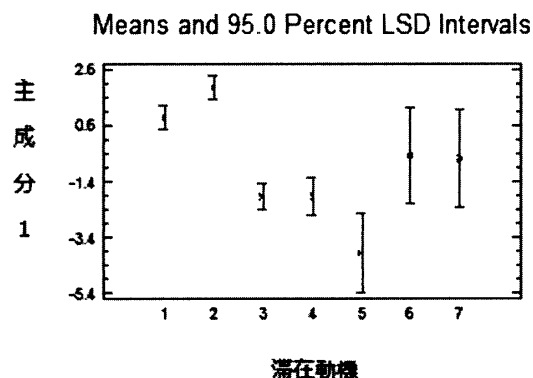
(1: 5年未満, 2: 5~10年, 3: 10~15年, 4: 15年以上)
図10 滞在年数と言語使用（日本語・現地語）

はカタルーニャ語使用で見ると、第一主成分ほど著しい差は現れなかった。実際、滞在年数が非常に長く、カスティーリャ語を使用するインフォーマントも少なくなかった。したがって、滞在年数は必ずしもカスティーリャ語とカタルーニャ語の使用を決定付ける要因であるとは言えないが、カタルーニャ語を主に使用するグループに分類されるインフォーマントのほとんどが15年以上の滞在歴である点は注目すべき点である($p = .563$)。

次に、滞在動機と言語使用の関係について見てみる。言語の習得において滞在の動機は重要な要素の一つとなり得るが、海外在住日本人の研究の多くが日本への帰国を前提として一時的に各ホスト社会に

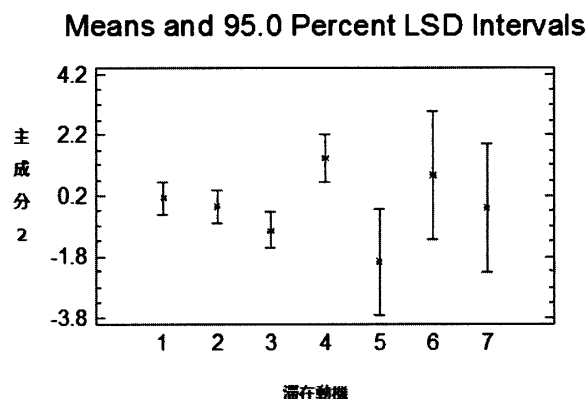
居住している日本人は現地語を習得するモチベーションが低いと指摘している。本研究でも同様の傾向が観察された。滞在動機をアンケートで提示した選択肢に基づいて七つにカテゴリ化して分散分析を行った結果、ビジネス関係でカタルーニャに在住している日本人およびその家族は日本語を主に使用する傾向にある一方、国際結婚など家庭の事情や学術、文化、感情的理由で自発的に移住してきた個人はどちらかという現地語を使用する傾向が観察された ($p < .0001$, 図11)。

一方、滞在の動機とカタルーニャ語とカスティーリャ語の使用の間には全体的にはさほど大きな相関関係は確認されなかったが、ある一定の傾向が観察された。



(1: 労働関係 2: 帯同家族 3: 国際結婚家族・日本人永住者家族 4: 学業関係 5: 感情的理由 6: 文化的理由 7: その他)

図11 日本語使用および現地語使用と滞在動機との関係



(1: 労働関係 2: 帯同家族 3: 国際結婚家族・日本人永住者家族 4: 学業関係 5: 感情的理由 6: 文化的理由 7: その他)

図12 カスティーリャ語使用およびカタルーニャ語使用と滞在動機との関係

労働関係、家庭関係で移住してきた個人にとって滞在動機はカタルーニャ語・カスティーリャ語使用を決定する重要な要素とは言い切れない。しかしその一方で、学術、文化、感情的理由で在住する個人の言語使用パターンとの間には、カタルーニャ語使用のグループに分類されるインフォーマントのほとんどが家庭に関連する動機でカタルーニャに在住し、学術、文化、感情的理由は観察されなかった ($p = .0313$) など、若干の相関関係が確認された (図12)。

4. おわりに

本研究により、カタルーニャ在住日本人の言語使用の実態が明らかになった。すなわち、彼らの言語使用パターンは均一ではなく、日本語・カスティーリャ語・カタルーニャ語の三つの主要言語使用パターンによってグループ化が可能であることを示した。また、カタルーニャの他の移住者に関する先行研究でも指摘されてきたように、日本人の場合もカスティーリャ語とカタルーニャ語がそれぞれ彼らの間で異なる役割を担うことも示唆された。つまり、カスティーリャ語は度合いの差はあれ、ホスト社会の日常生活のための基本的なコミュニケーションの道具としての役割を担っており、移住者はほぼ無条件に何らかの形で初めに学ぶ。しかしその一方で、カタルーニャ語の使用は国際結婚家庭など、特定の一部のメンバーに限られており、必ずしも「誰もが通る道」として位置づけられているわけではない。英語に関しては、カタルーニャ在住の日本人の間ではその使用はきわめて少なく、仕事など特定の領域に限られているか、あるいは補助的に用いられる程度であることが確認された。一般に、日本国外では英語があたかもリング・フランカのように使用されることが当然のように期待されることが多いが、こうした結果から現地語の重要性が改めて示された。

これらの言語使用のパターンには、家族構成や居住地域、職業、あるいは言語に対する見方や考え方など様々な要因が関わっており、更なる検討が必要であるが、本研究では主要な要因と位置づけられる滞在年数および滞在動機という二つの変数を取り上

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

げて分析を行った。その結果、これらの変数は日本語あるいは現地語の使用という二つの選択肢には関わりのある要因の一つとなり得ることが示された。その一方で、滞在年数と滞在動機は必ずしもカスティーリャ語とカタルーニャ語の使用を決定づける要因ではないことも示された。ただし、カタルーニャ語を主に使用するインフォーマントの全員が15年以上カタルーニャに居住している点、また在住期間が短くカタルーニャ語を主に使用して生活しているケースが観察されなかった点は非常に興味深い点としてあげられる。実際、カタルーニャ語のみを習得する、あるいはカタルーニャ語から先に学ぶケースは今回の調査ではほとんど確認されなかった。その点も考慮すると、前述のようにカスティーリャ語は基本的には誰もが初めに学ぶ言語、カタルーニャ語は一部の人々がカスティーリャ語の学習を経て任意に「統合の第二ステージ」(Fukuda, 2009a, 2009b)として学ぶ言語として認識されていると言えるだろう。

また、滞在の動機と言語使用についても、駐在員や帯同家族のように必ずしも自らの意思でカタルーニャに渡ったわけではない人々の言語使用は日本語にとどまる傾向があり、その一方で自発的に移住してきた人々は現地語使用のグループに多く見られるなど、一定の相関関係があることを確認することができた。

これらの結果は今回の調査でアクセスが可能だったインフォーマントに限られている。したがって、カタルーニャ在住全日本人の言語使用実態を完全に把握したというよりは、その大まかな傾向を俯瞰的に示したものである。しかし、これまで包括的な研究がなされてこなかった在外日本人の言語使用実態の一部が明らかになったという点においては意義深いと言える。

近年、グローバル化に伴って日本人の海外への移動はますます盛んになり、多言語社会に直接生きることも決して珍しくはない。本研究成果をベースとして、言語使用に関わる要因のさらなる詳細な検証や他の移住者との共通点・相違点の分析および他の多言語社会に居住する日本人との比較などを加え、

最終的には海外の様々な地域に在住する日本人の言語行動に関する総合的な研究へと発展させることが長期的な目標である。本研究はその基盤として位置づけられる。

付記

本稿は社会言語科学会第25回研究大会にて行った口頭発表「多言語社会における日本人の言語使用：スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース」(2010年3月、慶應義塾大学)に加筆・修正したものである。有益なコメントをくださった皆様には、この場をお借りして御礼申し上げたい。

なお、本研究はスペイン政府・科学技術省奨励研究プロジェクト“La evolución de las sociedades plurilingües: representaciones, comportamientos y capitales lingüísticos”(研究代表者：バルセロナ大学 Albert Bastardes i Boada)による助成を受けている。また、バルセロナ自治大学 Joaquín Beltran Antolín を代表者とする研究グループ INTER-ASIA から一部助成を受けている。

注

- 1) 本研究では日本語を母語とし、通常使用している者を指すこととし、国籍はとくに問わない。
- 2) <http://www.idescat.cat/es/poblacio/poblensling.html> (2009年2月10日)による。
- 3) こうした状況は、(1)カタルーニャ語とカスティーリャ語は全く同じ状況におかれているわけではなく、すべてのカタルーニャ語話者がカスティーリャ語を流暢に話せる一方、カスティーリャ語話者が全員カタルーニャ語を話せるわけではない、(2)移住者に関する問題は中央政府の管轄であり、カタルーニャ自治州は独自の移住者政策を制定することができないこと、(3)中央政府はカスティーリャ語の使用を優遇するため、カタルーニャ語の使用は特定の領域に限られてしまう。カタルーニャ社会に伝統的に根付いた、見知らぬ人あるいは外国人にはカスティーリャ語で話す、という慣習があるため、外国人がカタルーニャ語を学ぶ必要がなくなる、(4)カタルーニャ語がエスニック・アイデンティティと強く結びついていることが、外国人を含むヨソモノには近づきたくない「見えない壁」を形成している、(5)これらの新移住者はカスティーリャ語が優勢な環境で生活していることが多い、といった要因から説明される (Boix & Vila, 2006)。

- 4) 実際, Fundació Jaume Bofillが行ったアンケートによると, 外国人のうち19.8%がカタルーニャ語を理解できず, 50%が理解はできても話せない, 12.7%が話したり書いたりできる (*El Periódico*, 2008年5月11日より).
- 5) ScottとCartledgeは, イギリスは外国人学生にとって最も重要な留学先の一つであり, イギリス人が長期滞在している将来の配偶者と最も知り合うことが多いのは大学である, と述べている.
- 6) 定年を迎えた日本人は, 在カタルーニャの日本人の中でも少数派で, その多くが10年ほど前にCanet de Mar市に移住した人々である. 当時, 同市の市長が町興しを目的に, 有効な人材を活用しようと60歳以上の日本人を同市への移住プログラムに招待した. こうして選ばれた日本人がプログラムの助成金で同市に移住した. 当初はこの企画は成功していたが, 後にこれらの日本人間で人間関係の悪化による亀裂が生じ, グループの解散という結果に終わった.
- 7) 無論, 特定の店の主人や役所の役人と親しくなり, 頻繁な会話や相互行為がある可能性もあるが, ここでは個人間の社会的役割に注目した.
- 8) この囲い方は確率楕円のような厳密な根拠を用いたものではない. ○は必ずしも必要ではないが, 印刷物になった時点でグラフが非常に小さくなることが予想されたため, 読者にとって視覚的に分かりやすくして明確な結果を伝えることを目的に大まかな傾向を示した.
- 9) 著者の観察による. 実際, 基本的にはカスティーリャ語で意思疎通をしてはいるものの, 分からない語彙や表現については英語を補助的に用いている場面がしばしば観察された.

【参考文献】

- Aguilera, Montserrat (2001). Reflexions a l'entorn de la llengua, la immigració i la planificació lingüística a Catalunya. *Llengua i Ús*, **22**, 11-14.
- Aracil, Lluís V. (1983). *Dir la realitat*. Barcelona: Edicions Països Catalans.
- Befu, Harumi (2001). The global context of Japan outside of Japan. In Befu, Harumi, & Guichard-Anguis, S. (Eds.), *Globalizing Japan. Ethnography of the Japanese presence in Asia, Europa and America*. London & New York: Routledge Curzon.
- Beltrán Antolín, Joaquín, & Sáiz López, Amélia (2001). *Els xinesos a Catalunya. Família, educació, i integració*. Barcelona: Fundació Jaume Bofill.
- Beltrán Antolín, Joaquín, & Sáiz López, Amélia (2002). *Comunidades asiáticas en España. Documentos CIDOB. Relaciones España-Asia 3*. Barcelona: Fundació CIDOB.
- Ben-Ari, Eyal (2003). シンガポールの日本人 海外移住者のコミュニティの動態 岩崎信彦・Ceri Peach・宮島喬・Roger Goodman・油井清光 (編) 海外における日本人, 日本における外国人—グローバルな移民流動とエスノスケープ— 昭和堂 pp. 186-203.
- Boix i Fuster, Emili, & Vila i Moreno, Francesc Xavier (2006). Pròleg. Les noves immigracions, la integració i la llengua. In Boix i Fuster, Emili, Vila i Moreno, Francesc Xavier, & Arturo Monné, Núria (coord.), *Integrar, des de la fragilitat? Societats plurilingües davant els reptes de les immigracions multilingües: Suïssa, Luxemburg, Brusel·les, Quebec i Catalunya*. Col·lecció XARXA CRUSCAT 4. pp. 7-12. Barcelona: Institut d'Estudis Catalans.
- COLECTIVO IOÉ (1994). *Marroquins a Catalunya*. Barcelona: Enciclopèdia Catalana.
- COLECTIVO IOÉ (1996). La inmigración marroquí en Catalunya. In *Taller de Estudios Internacionales Mediterráneos*, pp. 146-151.
- 江淵一公 (1983). 子供たちの異文化接触 小林哲也 (編), 異文化に育つ子供たち 有斐閣 pp. 2-28.
- Fukuda, Makiko (2009a). Castilian or Catalan? Linguistic Survival of Japanese residents in Catalonia, Spain. *Studia Linguistica Upsaliensis*, **8**, 170-180.
- Fukuda, Makiko (2009b). *Els japonesos a Catalunya i la llengua catalana: Comunitat, ideologies i llengües*. Doctoral dissertation Department of Catalan Philology, Universitat de Barcelona.
- Glebe, Günter (2003). デュッセルドルフの日本人コミュニティ 岩崎信彦・Ceri Peach・宮島喬・Roger Goodman・油井清光 (編) 海外における日本人, 日本における外国人—グローバルな移民流動とエスノスケープ— 昭和堂 pp. 152-169.
- Goodman, Roger (1993). *Japan's 'International youth': The Emergence of a New Classe of Schoolchildren*. Oxford: Clarendon Press.
- Jaime i Femenia, Laura (2002). Entitats catalanes: porta d'entrada a la societat d'acollida i a l'autonomia personal. *Llengua i Ús*, **24**, 28-39.
- Llompарт, Júlia (2007). L'acolliment i la integració lingüística: Estudi del funcionament. <<http://www.culturamenorca.org/sal/wp-content/uploads/2008/02/acolliment-integracio-linguistica.pdf>> (2009年1月15日)
- López García, Bernabé (1992). Las migraciones magrebíes y España. *Alfoz*, **91-92**, 52-59.
- López García, Bernabé (1993). *Inmigración magrebí en España: el retorno de los moriscos*. Madrid: Mapfre.
- López García, Bernabé (1994). La inmigración marroquí en España: de la independència a la regularización. In Morales Lezcano, Víctor (Ed.): *El desafío de la inmigración en la España actual: una perspectiva europea*, Madrid: UNED. pp. 121-140.
- Losada, Teresa. (1993). Aspectos culturales de la inmigración magrebí. *Boletín de Estudios y Document-*

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

- ación, *Comité Español para el Bienestar Social, Enero-junio*, **2**, 89–92.
- Losada, Teresa (1996). Aspectos socio-culturales de la inmigración marroquí en España: familia, islam. Segunda generación. *Arbor*, **607**, 103–117.
- Losada, Teresa (1997). Aspectes culturals i jurídics de la integració dels musulmans en la societat catalana. *Revista del Col·legi, Col·legi Oficial de Doctors i Llicenciats en Filosofia i Lletres i en Ciències de Catalunya, Primavera de 1997*, **100**, 37–39.
- Losada, Teresa (1999). Tendencias de la inmigración marroquí y aproximaciones interculturales. *Migraciones*, **5**, 185–211.
- Miralles i Plantalamor, Joan.; Iturraspe i Bellver, Amaia. (2005). L'impacte lingüístic del turisme residencial al Pla Mallorca. *Llengua i Ús*, **34**, 75–83.
- 中根千枝 (1967). タテ社会の人間関係—単一社会の理論— 講談社
- Pereña, Mònica (2007). Com acollim lingüísticament les persones que arriben a Catalunya: Els plans pilots. *Llengua i Ús*, **38**, 18–26.
- Ros, Adela (2006). Catalunya davant el nou repte migratori. In Boix i Fuster, Emili, Vila i Moreno, Francesc Xavier, & Alturo, Monné, Núria (coord.), *Integrar, des de la fragilitat? Societats plurilingües davant els reptes de les immigracions multilingües: Suïssa, Luxemburg, Brusel·les, Quebec i Catalunya*. Col·lecció XARXA CRUSCAT 4. pp. 51–56. Barcelona: Institut d'Estudis Catalans.
- Rovira, Marta, Castellanos, Eva, Fernández, Marta, & Saurí, Enric (2004). *El català i la immigració. Anàlisi de l'oferta de cursos del català als immigrants adults extracomunitaris*. Informe general per a la Fundació Jaume I. Barcelona: Editorial Mediterrània
- 佐藤郡衛 (1997). 海外帰国子女教育の再構築—異文化教育学の視点から— 玉川大学出版部
- Secretaria per a la Immigració (2005). El Pla de ciutadania i immigració, un pla per a tothom. *Llengua i Ús*, **34**, 4–10.
- Scott, Sam, & Cartledge, Kim (2009). Migrant Assimilation in Europe: A transnational family affair. *International Migration Review*, **3**, 60–89.
- 柴野昌山 (1983). 海外日本人コミュニティとその教育問題 小林哲也 (編.) 異文化に育つ子供たち 有斐閣 pp. 86–107.
- Torres, Joaquim (2003). L'ús oral familiar a Catalunya. *Treballs de Sociolingüística Catalana*, **17**, 47–76.
- Torres, Joaquim (2005). Ús familiar i transmissió lingüística, J.Torres (coord.). *Estadística sobre els usos lingüístics a Catalunya 2003. Llengua i societat a Catalunya en els inicis del segle XXI*. Publicacions de l'Institut de Sociolingüística Catalana Sèrie Estudis, No. 8. Barcelona: Secretaria de Política Lingüística, Departament de la Presidència, Generalitat de Catalunya, pp. 81–108.
- Torres, Joaquim (coord.) (2005). *Estadística sobre els usos lingüístics a Catalunya 2003. Llengua i societat a Catalunya en els inicis del segle XXI*. Publicacions de l'Institut de Sociolingüística Catalana Sèrie Estudis, No. 8. Barcelona: Secretaria de Política Lingüística, Departament de la Presidència, Generalitat de Catalunya.
- Torres, Joaquim (coord.) (2006). *Estadística sobre els usos lingüístics a Andorra 2004. Llengua i societat a Andorra en els inicis del segle XXI*. Publicacions de l'Institut de Sociolingüística Catalana Sèrie Estudis, 9. Barcelona: Secretaria de Política Lingüística, Departament de la Presidència, Generalitat de Catalunya.
- Valls i Campà, Lluís (1998). La presencia humana de Japón en España. *Papers*, **54**, 157–67.
- Vila i Moreno, Francesc Xavier. (2003). Els usos lingüístics interpersonals no familiars a Catalunya. Estat de la qüestió a començament del segle XXI. *Treballs de Sociolingüística Catalana*, **17**, 77–158.
- White, Paul (2003). ロンドンにおける日本人—コミュニティ形成過程— 岩崎信彦・Ceri Peach・宮島喬・Roger Goodman・油井清光 (編), 海外における日本人, 日本における外国人—グローバルな移民流動とエスノスケープ— 昭和堂 pp. 131–151.
- Woolard, Kathryn A. (1989). *Double talk: Bilingualism and politics of ethnicity in Catalonia*. Stanford: Stanford University Press.
- Yamamoto, Masayo (2001). *Language use in interlingual families: A Japanese-English sociolinguistic study*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Yamamoto, Masayo (2002). Language use in families with parents of different native languages: An investigation of Japanese-non-English and Japanese-English families. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, **23**, 531–554.

(2011年10月14日受付)

(2012年8月27日修正版受付)

(2012年9月4日掲載決定)

付 録

アンケート見本（言語使用に関する質問項目のみ抜粋，一部資料のために簡略化）

家庭外での言語使用

・近所の人との接触はありますか？ 該当する頻度に印をご記入下さい。

（ほとんど）毎日 週に数回 月に数回 年に数回 めったにない ない

☞「まったくない」「めったにない」以外をお答えになった方：

最も接触の多い隣人の名前を3名あげてください。また，それらの人々と話す際，通常何語を使用しますか？ 該当するものに印をご記入下さい。複数の場合は，最も使用する言語に◎もご記入下さい（以下，すべての質問の回答に対して以下の解答欄を使用）。

日：日本語 ス：カステイーリャ語 カ：カタルーニャ語 英：英語 他：その他					
名前またはイニシャル	使用言語				
	日	ス	カ	英	他
(1)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(2)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(3)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

・現在，何をしていらっしゃいますか？

会社員 自営業 無職 退職 主婦 学生 その他：[]

☞一緒に仕事をしている（勉強をしている）で，最も接触の多い人の名前を3名，頻度の高い順にあげてください。また，その方々と通常，何語で話しますか？ 該当するものに印をご記入下さい。複数の場合は，最も使用する言語に◎もご記入下さい。

・現在，何らかの協会や団体に加入していますか？（例：水曜会，PTA，スポーツクラブなど）

1. はい 2. いいえ

☞「はい」とお答えになった方：どのような協会・団体に，それぐらいの頻度で参加していますか？ 加入している団体名あるいは活動名，およびその参加の頻度をお答えください。

これらの団体や活動において，もっとも接触が多い人の名前を3名，頻度の高い順にあげてください。また，その方々と何語を使用して話しますか。該当するものに印をご記入下さい。複数の場合は，最も使用する言語に◎もご記入下さい。

・余暇は何をしていらっしゃいますか？（例：趣味の集まり，スポーツなど）どのような活動に，どのぐらいの頻度で参加していますか？ 活動名と，その頻度をお答えください。

☞これらの活動において，最も接触の多い人の名前を3名，頻度の高い順にあげてください。また，その方々とは何語で話しますか。

福田：多言語社会における日本人の言語使用—スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース—

・週末を一緒に過ごすことが多い人を、頻度が高い順に3名あげてください。また、その方々とは何語を使って話しますか。該当するものに印をご記入下さい。複数の場合は、最も使用する言語に◎もご記入下さい。

・最近3ヶ月以内に、以下の項目を行いましたか？ 該当するすべての項目に印をご記入の上、その回数もお答えください。

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 自宅で昼食・夕食・お茶などを企画 | 誰かと出かける（食事、お茶、買い物など） |
| 誰かの家で、昼食・夕食・お茶など | 電話で友人・知人とおしゃべり |
| 来客 | 誰かを訪問する |
| その他：[] | |

☞これらの活動において、最も接触の多い人の名前を3名、多い順にあげてください。また、それらの方々とは何語で話しますか？ 該当するものに印をご記入下さい。複数の場合は、最も使用する言語に◎もご記入下さい。

・以下の場所において通常何語を使うことが多いですか？ 該当するものに印をご記入下さい。複数の場合は、最も使用する言語に◎もご記入下さい。

	日本語	カスティーリャ語	カタルーニャ語	英語	その他
商業施設（スーパーなど）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
銀行、郵便局、役所	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
交通機関（地下鉄、タクシーなど）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
レストラン、バル、カフェ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
タバコ屋、キオスク	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
病院	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

家庭内での言語使用

(a)現在、どなたとお住まいですか？ 該当するものすべてに印をご記入ください。

- 配偶者 子供 その他の家族 パートナー ピソ（アパート）の同居人・友人 ホスト・ファミリー 一人暮らし その他：()

(b)その方々と、通常何語を使ってお話しますか。該当するものの記号の上に*をご記入下さい。複数の場合は、最もよく使用する言語に◎をご記入下さい。（日：日本語、ス：カスティーリャ語、カ：カタルーニャ語、英：英語）

話しかける人 ☞☉	話しかけられる人 ☉☞				
	本人	配偶者 []	子供 []	子供 []	…
本人		日スカ英他	日スカ英他	日スカ英他	日スカ英他
配偶者 []	日スカ英他		日スカ英他	日スカ英他	日スカ英他
子供 []	日スカ英他	日スカ英他		日スカ英他	日スカ英他
子供 []	日スカ英他	日スカ英他	日スカ英他		日スカ英他
…	日スカ英他	日スカ英他	日スカ英他	日スカ英他	

メディアにおける言語使用

以下のメディアの中で、どのようなものを利用しますか？ 該当するものすべての利用頻度、言語を選んで
 *印をご記入ください。(日：日本語, ス：カステイーリャ語, カ：カタルーニャ語, 英：英語)

	毎日	週に数回	月に数回	年に数回	まれに	利用しない
新聞	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英
雑誌	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英
ラジオ	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英
テレビ	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英
ビデオ/DVD	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英
インターネット	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英
本	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英
その他 []	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英	日スカ英

その他の言語のメディアは利用しますか？

1. はい 2. いいえ

☞ 「はい」とお答えになった方：主にどのようなメディアを、どのぐらいの頻度で利用しますか？

言語： メディアの種類： 頻度：